

内 容

* 2020年を振り返って

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1. 2020年を振り返って | 理事長 長野 敏宏 |
| 2. コロナ禍の1年 | 監事 エスポアール出雲クリニック 高橋 幸男 |
| 3. 今年1年を振り返って | 実行委員 つがるねっと(弘前市) 貴田岡 武 |
| 4. 今年を振り返って | 実行委員 エスポアール出雲クリニック 形部 周平 |
| 5. バーンアウト寸前です | 実行委員 (社福)尾道のぞみ会 橋本 周治 |
| 6. 今年を振り返って | 実行委員・事務局 中野 良治 |

* 2020年を振り返って

1. 2020年を振り返って

理事長 長野 敏宏

この10年、“想定外”が多すぎます。そもそも勉強不足なのかもしれませんし、想像力が足りないのかもしれませんが、私たちにとっては“想定外”と言わざるを得ないことが続いています。2020年、何があった？と問われると、いわゆる新型コロナウイルス covid-19 がどうしても一番に頭に浮かびます。それも現在進行形で全く収束に向かっていない状況であることに焦りを感じざるを得ません。愛南町でも、感染そのものの問題も大きいのですが、職場に感染を持ち込むことに細心の注意を払わざるを得ない関係者と世間の温度差が深刻になってきました。その事を期に退職転職を考えたり、決める方も散見し始めてしまっています。“ひと”が全ての基盤となる社会で感染症の脅威はこれほどのものか、と再認識させられます。スペイン風邪などこれまでも経験し、歴史は伝えられているはずなのにはじめてのこのように感じてしまった自分が不甲斐なくてたまりません。

全国から手土産を持って谷中さんのもとに集っていたやどかり研修センターにルーツを持つ当協会にとっては、一番大切にしてきた「遠くの仲間が緩やかに集うこと」「現地の空気をすって、五感をフル稼働し、さらには第六感も大切にしながら学び、考えること」という大きな2本柱を断念せざるを得ない状況でした。今年も、仁木さんに頼りきりの1年で、本当にありがとうございます。

ただ、3月以降、次の時代に向けて懸命に動いてきましたので、少しでも話題提供させていただきます。

○3月はじめ、愛南町内で陽性になった方がお一人おりました。私たちにとってはごく近くの感染者で、外来休診をはじめとして多くの対応を迫られました。やはりここで直面したのは、ICTの活用についての取り組みの遅れでした。決して避けてきた訳ではありませんが、とても現場で通用するレベルではないことに気付かされました。リモートで打ち合わせをするにも、端末やWiFiなど通信基盤の問題が露呈しました。もちろん遠隔診療もできるのですが、実際にできる状態ではありませんでした。もちろん ICT 以外で打開

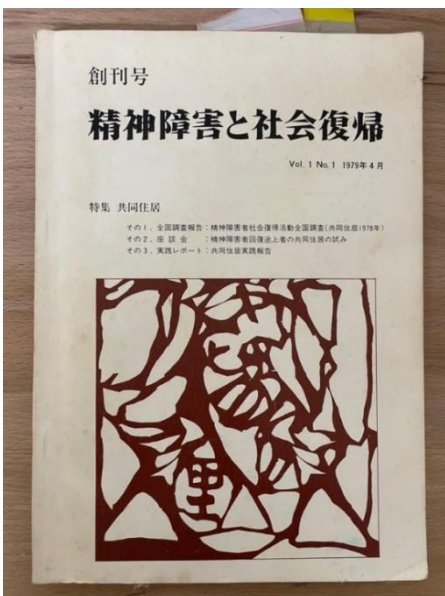
策を見出すことが出来ればよかったかもしれませんが、どうしてもその方法は見つかりません。3月は全てをストップしてその準備をはじめました。Covid-19について現在ほど情報もありませんし、得体の知れないウイルスと対峙することの苦しさを嫌というほど味わいました。最低限の準備ができた4月はじめ、NPO なんぐん市場で働いてくださっている方お一人とそのご家族に陽性、当時は濃厚接触者に対する検査もほとんど行われず、こちらでリストアップし、自宅待機していただき、健康状態を日々フォローすることが必要でした。自宅待機者は50名近くになりました。また、濃厚接触ではなくても多くの方が関わっていますのですべての人ができるだけ会わないようにしながら、食事などの日常生活支援や各所の消毒も含め3週間近くを費やしました。もちろん遠隔診療や相談、支援を少しでも途切らせることが難しい方々へのフォローもとても緊張感の高いものとなりました。この体制は、やはりICTの活用なしでは難しかったと思います。インターネット通信またそれをつなぐ機器は、水道・道路(物流)・電気(エネルギー)に次ぐライフラインだと腹に据えました。ただ、その体制をつくったのは法人内のSEでした。20年近く一緒に働いてきた心理士でもある彼は、医療福祉の現場や人を熟知していて、見事にマッチした基盤づくりを続けてくれています。もちろんそれを使うのは“ひと”であることもあらゆる場面で痛感させられています。

医療福祉では感染対策により従来の事業運営ができません。なんぐん市場でも、農業は働く方の自宅待機により作業が進まず、山出憩いの里温泉もストップし、あらゆる面で切迫した状況の中で次の時代への準備を進めています。産直バイキングは配食サービスへ、農業は様々な人の総動員。行政の補助金にも本当に助けられています。また、急な新たな体制への転換に対応するスタッフの皆さんには本当に頭が下がります。さらに、少し大きな動きとしては、山出憩いの里温泉の改装が決定、街中に大きな新拠点を確保できたこと、働き方と働く場の環境の大幅見直し、といったところでしょうか。まだまだ進行中です。諦めるわけにはいきません。

あと、私自身は御荘にきてはじめてと言っていいほど外に出ていないため、時間が沢山出来ました。その時間を使って行っていることが“片付け”です。御荘病院が昭和37年に開院して以来溜まりに溜まってきたカルテや経営試算表などをはじめとする資料類、いつか使えるかもと溜めにためこんだ“(今となっては)ガラクタ”、ようやく全部見直せました。空いたスペースを次の働き方や、集い方、災害対策などを考えながら、馴染みの大工さんに改装してもらっています。

その中から、行方不明になっていた大切なものをやっと見つけました(すみません)。

「共同住居の活動を通じて」と題された谷中前々理事長の書かれた巻頭言を改めて読み直しました。一部を紹介します。



このたび「精神障害と社会復帰」創刊号として共同住居の活動に焦点をあわせた特集を企画した。

「社会復帰」の活動は「共同住居」だけでなく、「作業訓練」「デイケア」「回復者クラブ」等各地でさまざまな取組みがなされている。社会復帰活動を推進していく際に精神障害者が要請してくることがらを大きくまとめると3つの要素になる。「住まい」と「職」と「仲間」である。そのうちでも「住まい」をどう獲得し、そこでも生活をどう支えていくかが社会復帰への大きな課題として、あるいは壁として立ちあらわれてくることは誰もが経験することであろう。これらのことを病院の「隔離収容」の弊害として指摘することはたやすい。しかし現に病的症状は消失していても、ごくあたりまえの生活を営

むには困難な患者が数多く存在することは事実である。また、長期の入院ということは彼らに家庭における場を喪失させ、1人暮らしを余儀なくされている現実もある。病棟が社会に開かれ、日常生活にさほど困難を感じない日があるであろうが、現在の医療状況がさほど近い将来変わりうる保証はどこにもない。とすれば「誰が」「どんな形で」「ごくあたりまえの生活の実現に向けて」「精神障害者」を社会に戻すことを行っていったらよいのであろうか。

(中略)

この特集が今後の「精神障害者」の住居のあり方をめぐる討論の素材になることを期待している。もちろん「住まい」の問題だけではない。「精神障害者」が社会の中で生きていくことに何が必要なのか。我々は何をなすべきなのか。「精神障害者」の立場に立つて再び検討する必要がある。「住まい」は一つの活動として今後もそのあり方が問われるであろうが、より「社会復帰」のための総合的、且つ、統合的な地域における援助体制を考えていかなければならなくなるであろう。これらの実践から、近い将来そのあり方が明確になってくることを願っている。そしてそれはあくまでも実践の中からでてくることを期待している。

1979年4月掲載の巻頭言です。実に41年前。私たちはこれ以上の風景をまだ見えていないような気さえます。ただ、私自身は以前読んだ時とは少し違って捉えました。以前はただただ反省、堂々巡りを止めなければ、という思いが先に立ちました。けど、それは少し違うかもしれない、と。この41年、ご本人をはじめとする多くの関係者が真剣に取り組んできています。「物事は螺旋状に良くなっていく。良くしていくしかない。」大切な事はいつの時代も同じで、常に原点に戻りながら、歴史を学びながら、今の時代またこれからの時代に合わせて、ゆっくり進化・深化させていかざるを得ないのかもしれない、と思いはじめています。もちろん、直ちに解決しなければその人の人生が終わってしまうほどの課題も沢山抱えていて、待たなしであることには違いありません。その事を肝に銘じながらも、螺旋がご本人にとって良い方向に向いているのか常に確認しながら、取り組みを続けることが大切だと改めて思い直しています。厚労省の「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム」の検討会も開催されています。課題は山積ですが、螺旋の方向はいい方に向かっているような気もしています。また、皆さんと情報共有しながら歩み続けたいと考えています。

協会としても、ぼちぼち次のあり方の模索をはじめます(のんびりしすぎですみません)。年明け早々にリモートでの役員会を開催します。生命を守る事はやはり第一にしながらも、各地のつながりの緩やかな再構築、様々な情報共有、また、海外セミナーの復習や場合によっては新たな研修もリモートでの開催ができないか等、頭の中はグルグルと回り始めています。もちろんリモートだけではいけません。“会う”ことの大切さも痛感しています。感染予防を徹底しながら、車で移動して、数分でも屋外で、ということもとても価値あることではないかと考えています。また、アイデアや各地から“あったらいいな”をお寄せください。

激動の2020年、本当にお疲れ様でした。来年もよろしく願いいたします。

2. コロナ禍の1年

監事 エスポアール出雲クリニック 高橋 幸男

今年新型コロナウイルス感染症のために、世界のあり様が大きく変化しました。

日々の臨床でも、感染予防のためにエネルギーを使わざるをえず、すべきことが自由にできなくなり委縮しがちでした。

個人的にも、講演や学会などで出雲から遠方に出る機会はほとんどなくなり、出雲に閉居していました。

2 か月に 1 回石巻市の震災支援に行き続けていましたが、それも途絶えてしまいました。つながっている方とは、今はリモートで面談しています。

しかしその分じっくりクリニックに居ることができよかったです。面も多かったです。

それは、まったく偶然ですが、当院は今年が開院して 30 年になるなかで、コロナと関係なく新たなチェンジを求めて変化した 1 年でした。

コロナが広がる時期に組織的に大改革を行いました。当院の理念を共有する 40 歳前後の若手の管理者を全員法人理事として結集してもらい、改めてエスポアール出雲クリニックがこの先どのようにあればいいのか皆で考えていくことにしました。月に 2 回の理事会は活発で着想豊かな意見が飛び交っていますが未来が明るくなります。それとともに各部署の代表を集めた運営委員会をこれまで以上に充実させるようにしましたが、100 名近くのスタッフ間の距離がぐんと近づいた気がします。

来年度は新たな展開が始まりますが、このあたりのことについては当院の新理事の形部周平氏が語ってくれると思います。

本年も、協会の活動には何も参加できず申し訳ありませんでした。

コロナに負けぬ皆様の健康を祈願しつつ、新しい年が皆様にとって良い年でありますように願っています。

3. 今年 1 年を振り返って

実行委員 つがるねっと(弘前市) 貴田岡 武

青森県弘前市で就労継続支援 A・B 型をやっていますつがるねっとの貴田岡武です。

今年は新型コロナの影響で今まで経験したことのない 1 年が終わりますがみなさんお変わりありませんでしょうか？

青森県は各県でコロナの感染者が増えるなか、島根県、岩手県、とならび長い間コロナの感染者数が 0 人で、なんとなくコロナに関して「どこ吹く風」という雰囲気でありました。しかし弘前で 10 月の中頃に飲食店のクラスターが出てから町の中は一変しました。結果的には弘前のクラスターは 200 名規模まで膨れ上がり、そこからは飲食店を中心に営業を中止し学校は長期休校。得体のしれない恐怖に不安を募らせる中、同じ地区の事業所からコロナ発生には、再度コロナ対策を考える日々が続きました。

利用者も何かしらいつもと違う生活パターンを余儀なくされ、その影響もあり不調になる方もいました。また事業所によっては法事などで県外のかたと接触があった場合 2 週間グループホームや就労などの施設の入出禁止等があったり、逆にグループホームから他の日中活動に行くのを禁止するところもありました。

当事業所としても月 1 回開催していた精神障がいに関心がある方々で集まっていた「おしゃべり会」の中止や、新規事業展開の見送りなど様々ありましたが、細々ながらできることをやり働く場所そして居場所で動いていました。振り返るとあらためて居場所の大切さとながりの大切さを痛感しました。

ただこのコロナ渦でも(コロナ渦だから)就労継続支援 B 型バナナの樹で作っている津軽お化け珈琲の「アマビエ」が全国各地からたくさんのご注文いただきました。今日は高知から注文だ！今日は東京だ！と利用者から楽しそうな声を聞きながらコーヒーを作っていると不謹慎ながらもうれしさを共有していました。

※お化け珈琲ご興味のある方は下記へ
<https://tugarunetto.thebase.in/>



おかげさまで私たちの事業所も 2020 年 9 月で 3 年を経過することができました。これからも働くことを通じ障があっても生活者としてのかかわりを大切に、町の中でみんなで頑張っていきたいと思ひます。まだまだ落ち着かないと思ひますが頑張っていましよう。皆様来年もよろしくお願ひいたします。

4. 今年を振り返って

実行委員 エスポアール出雲クリニック 形部 周平

今年の漢字は？と問われれば、御多分に洩れず『密』、『肅』、『変』などコロナ関連の一字が思ひ浮かびます。それほどコロナに翻弄された一年でした。昨年の今頃を思ひ返せば、当たり前の生活が当たり前でなくなる等と疑いもしていませんでした。今はただ、当たり前の生活が戻ってくることを一日千秋の思ひで待つ、そんな年の瀬を過ごしています。

さて、この 11 月から本協会の実行委員を務めさせていただくことになりました。時々、RPJNews に寄稿させていただいていますが、改めまして、よろしくお願ひいたします。私は、精神保健福祉士として入職後は単科の精神科病院を母体に持つ、精神障害者地域生活支援センター、グループホーム等を経験し、平成 26 年 4 月に縁あってエスポアール出雲クリニックへ転職しました。当院では、外来での相談対応や障害福祉の相談支援専門員、就労支援などに従事し、ご本人の思ひに寄り添って支援を行うように心がけています。

これから本協会の発展に少しでもお役に立てればと思ひます。来年もよろしくお願ひいたします。

5. バーンアウト寸前です（愚痴っぽいので、読み飛ばしてください）

実行委員（社福）尾道のぞみ会 橋本 周治

新型コロナウイルス感染症により、皆様大変な日々を過ごされていることと思ひます。

広島県でも感染者数が激増しており、広島市などはレベル 3 になっています。尾道市は他市と比べて少ないですが、観光地でもあり、感染者数が徐々に増えている状況です。

命と健康を守るため、あらゆる活動や行動も制限された中での生活となり、それがために経済的にも困窮した方が増えています。感染症対策と経済対策の両立は非常に難しく、自営業をしている友人たちは「先が見えない」とか「コロナが終息する頃までもたない」と嘆いています。

コロナウイルスによる影響はまだまだ続くでしょう。またコロナが終息しても経済的ダメージからの回復は相当な期間を要するでしょう。これまでのスタイルでは通用しなくなっているため、新しいスタイルを創っていく必要があります。

人と人との繋がりも分断され、私たちの活動もこれまでと同様なことはできなくなりました。また、活動を自粛しても、私自身の仕事は減るところか増え続ける一方で、心身ともに疲れ果て、限界を感じています。正直バーンアウト寸前です。

それでも歯を食いしばりながら「芽を出すことができないなら、根を伸ばせ」と力を蓄えることを意識し、将来を担う「人材」を「人財」に育成するための評価制度や未来会議などに取り組んでいます。コロナ禍の制限された中では、私の意図や想いはスタッフに伝わりづらく感じています。

唯一の楽しみは未来会議開催に先駆けて実施したスタッフへのアンケート結果です。課題ややりたいこと等を書いてもらいました。現時点でまだ集計できていませんが、匿名で実施したこともあり、みな忌憚のない意見を書いてくれています。もちろん前向きなことのみでなく、批判も数多くあります。それらを含めて「あ

りがたい」「宝物だ」と思っています。真摯に受け止め取り組むことで、尾道はもっと魅力的な町になります。

「ピンチをチャンスに」とは谷中先生の言葉です。仁木美知子さんからも同じ言葉をよくいただきました。こんな時代だからこそ忘れてはならない言葉だと思います。

また、谷中先生は生前、“大事 MAN ブラザーズバンド”の“それが大事”という曲が好きだと話されていました。「負けないこと、投げ出さないこと、逃げ出さないこと、信じ抜くこと、ダメになりそうな時、それが一番大事♪」

いい言葉です。そのとおりです。

でも私はバーンアウト寸前です。

6. 今年を振り返って

実行委員・事務局 中野 良治

今年もあと僅かとなりました。「新型コロナウイルス」でいつの間にか 1 年が過ぎ、全くいつもの年の瀬とは違った感覚です。

愛南町でも 3 月に初めての感染者が出た後、4 月に私たちの就労支援事業所でもお一人。幸い事業所内での感染拡大はありませんでした。

ただ良かったことも。感染防止のため、集まらなくても、移動しなくても ICT を活用し仕事ができることの整備が各現場でも一気に進んでいます。特に情報共有のスピードとやり易さは以前とは比べものにならないほどに。今までの無駄の多さにも気付かされた反面、会うことの大切さも感じています。

皆さんともしばらくはオンラインでお会いすることになるでしょうか。

いつになるのか分かりませんが、またお会いできることを楽しみにしております。

そして、長年に渡り協会にもご尽力くださっている小出さんがご無事でいることを願っております。



—編集後記—

2020 年は、日本にとっても、その他の国にとってもオリンピックイヤーとして、4 年に 1 度のお祝いすべき、また、楽しむことができる 1 年であったはずでした。

ところが、武漢(中国)での COVID-19 の発生から、たちまち、世界中に拡大して、年が暮れようとしている現在(いま)も、その拡大は止まる様子はありません。恐怖さえ感じています。毎日、更新される感染者の数を確認しながら、明日は私のところで・・・と、毎日、暗い思いをしています。

そんな中で、皆さんのご協力により月に 1 度 RPJNews を発行することができました。皆さんのご協力に改めてお礼を申し上げます。まだ、暫くは、直接皆さんにお目にかかることは叶わないと思いますが、紙面や今後 Zoom などを通してお目にかかることができるようになると思います。引き続き、ご協力をお願いいたします。

2021 年は、きっと、今年より明るい年になると思います。皆様におかれましては、お身体を大切になさり、どうぞ良いお年をお迎えください。(m.shiida)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL090-1811-7119